

山梨県におけるホームレスへの  
健康支援を行うための予備的調査  
—甲府駅周辺の調査を中心に—

古川 奨 長谷川 武史<sup>1)</sup> 倉島 秀明<sup>2)</sup>

Preliminary investigation for offering health  
support for homeless people  
—Field research around Kofu station—

FURUKAWA Tsutomu, HASEGAWA Takeshi, KURASHIMA Hideaki

抄 録

本調査は、山梨県におけるホームレスの実態を把握するためのフィールド調査を円滑に行うための予備的調査である。調査の移動に必要とされる時間の把握、面接に必要な時間の計測を行った。調査は徒歩による移動であること、一人一人に声をかけながらの確認が必要なこと、移動中に声をかけ、必要とする方に支援物資の配布を行うこと、調査協力をお願いを行うため、3時間の調査時間で行える移動は、半径約500m程度の範囲であった。この予備的調査の際に出会えたホームレスの方は6名であり、全国調査データのほぼ半数に出会えた結果となる。しかし、フィールドワークを通しての実感は、調査人員を増やし、範囲と調査日時を増やすことで、全国調査データ以上の人数がホームレスとして存在していると思われ、一人でも多くの健康維持に寄与するために調査を続けていく必要があると考える。

キーワード：フィールドワーク

ホームレス

健康支援

1) 名寄市立大学

2) 健康科学大学

## I はじめに

ホームレスとは、平成14年のホームレスの自立の支援等に関する特別措置法より、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」と定義された。厚生労働省によるホームレスの実態に関する全国調査では、ここ数年間、年々減少傾向にあり、平成26年調査結果では7508名までホームレスは減少したと報告している。この全国調査は、国が各都道府県に対し調査を委託し、各都道府県の管内市区長村が調査を実施する。実施方法は、全国の市区町村において、巡回による目視による調査とされている。平成26年調査では、山梨県のホームレスの実態は、男性9名と不明4名からなる合計13名であり、ホームレスの合計数だけを見ると昨年の平成25年調査の16名から比較し3名減としている。しかしながら、注目すべき点として、ホームレス数の報告の中に男女別の数値が記載され、その他に不明の欄がある点である。厚生労働省の報告には、調査を1月に実施したとあり、そのため、防寒具を着込んだ状態等により性別が確認できない者を不明者として扱ったとある。このことから目視のみによる調査による実態把握には限界があることがわかる。さらに注意点を挙げるのであれば、目視による調査では、ホームレス状態にあるにもかかわらず、身なりからはホームレスと判別することが難しい方やホームレス状態ではないがホームレスにカウントされる方など目視を行う者からの影響を強く受けている調査であると言える。そのため実態調査と言うよりも大枠を把握するための調査と言わざるを得ない。

そこで本調査では、ホームレスに対する健康支援を行うための予備的調査として、山梨県の県庁所在地にあり、人口の移動が集中すると思われる甲府駅を中心にホームレスの実状の把握に努め、今後の円滑な調査及び支援を行うための一助とすることを目的とした。

なお調査の際、猛暑が続いているため、ホームレスの健康への影響として脱水症状等が心配された。そのため健康支援として調査への協力有無にかかわらず、必要としている方に対し、2Lペットボトルの飲料水2本、水分を含みやすく冷やししやすいアイスタオル、虫よけスプレーをセットにして配布を行った。

## II 方法

### 1. 調査日時

調査日時2014年8月5日(火)、時間は19時から22時とした。

### 2. 調査対象及び調査方法

調査対象は、同日のJR甲府駅半径1km圏内(図1参照)で路上生活を行っている方とした。徒歩によるフィールドワークを行い、目視のみでなく、声掛けを行い路上生活者と確認できた方に対し調査協力をお願いした。フィールドワーク中、6名のホームレスと値遇することができ、調査の趣旨を伝え協力をいただけると返事をいただいた3



図1 調査予定範囲

名を対象とした。調査方法は、他記式質問紙票（資料1を参照）を用いた面接法によるアンケート調査を実施した。

### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、1) 強制的な調査ではなく、辞退した場合でも対象者に不利益が被ることはないこと、2) 調査中に辞退が可能なこと、3) 調査については無記名で行い、調査で得た情報に関しても研究目的以外には使用しないことを伝え、個人情報の保護を徹底することを説明し、同意を得られた方から回答を得た。

## Ⅲ 結果

### 予備的調査としての結果

#### 1) 調査に要する所要時間等

質問紙票の内容の説明等、導入部分を含め、一人に対する面接は10分程度の時間で必要な情報を聞くことが可能であることがわかった。しかし、調査対象となりうるホームレスは、一定の場所に定住していないため、公園内、橋の裏、細かな路地裏等を調査する必要があり、面接に至る前に必要となる時間が多く、予定していた3時間では調査予定の範囲をくまなく巡ることは不可能と分かった。特に甲府駅周辺の地理的状況は線路があるため、歩道橋的なつくりになっている通路があり橋上橋下の確認、大きな公園内の東屋やベンチ、建物間の細道と確認する場が多く、甲府駅から円状に確認をしていくのであれば、予定の3時間では調査予定範囲としていた半径1kmの半分、半径500m

資料1

主観的健康観と生活習慣について 古川ゼミ 調査票

①持病があるなし関係なく

自分は今、健康と感じていますか。

非常に健康・まあ健康・あまり健康ではない・健康ではない

②健康への関心はありますか。

ある・ない

③毎日の生活で気を付けている項目についてお答えください。

睡眠時間 ( )

食事 ( 朝 ・ 昼 ・ 夜 )

栄養バランス ( 良い ・ まあまあ ・ 悪い )

飲酒 ( 飲む (量 ) ・ 飲まない )

たばこ ( 吸う (一日 本) ・ 吸わない )

運動 (10分以上歩いている ほとんどない )

その他

---

---

---

---

---

---



図2 実際の調査範囲

が限界であることもわかった。実際の調査範囲は図2に示した。

## 2) 質問紙に対する回答結果

質問紙票への回答 一人目 A さん

Q. ①持病があるなし関係なく自分は今、健康と感じていますか。

A. あまり健康ではない。

Q. ②健康への関心はありますか。

A. 関心ない。

Q. ③毎日の生活で気を付けている項目についてお答えください。

A. 睡眠7時間

食事 朝と夜のみ、昼は暑いので食べたくない

栄養バランス コンビニばかりのため悪い

飲酒 缶ビール一本程度

たばこ 一日に2箱程度

運動 移動手段がないため 10分以上歩く

質問紙票への回答 二人目 B さん

Q. ①持病があるなし関係なく自分は今、健康と感じていますか。

A. 腰痛など持病はあるが、自分なりにはまあ健康と感じている

Q. ②健康への関心はありますか。

A. 健康への関心はある。そのため食べ物に気を付け野菜を取るようにしている。

Q. ③毎日の生活で気を付けている項目についてお答えください。

A. 睡眠時間 5～6時間まちまちだがとるように心がけている。

食事 食欲はあるが金銭的なものからまちまちで1食又は2食である。

朝は多く食べるようにしている。

その他

A. 痛などが気になる・健診などはあればいい

質問紙票への回答 三人目 C さん

Q. ①持病があるなし関係なく自分は今、健康と感じていますか。

A. 健康です。健康には気を付けています。それ以上は大丈夫ですと面談終了。

## IV 考 察

今年度の古川ゼミには4年生が11名所属している。それぞれが老人への支援や精神障害を抱えた方への支援等様々な分野に対し学習を進めている。その中で、今回の調査を行うに至った経緯として、ゼミ生2名の積極的な活動に動かされたところが大きい。学生に対するゼミ学習において、ホームレスの実態についての全国調査データを伝えたところ、山梨におけるホームレスの実態について興味を持ち始めた2名の学生が、自主的に生活保護法第三十八条にある救護施設への見学や炊き出し、緊急一時宿泊、生活保護申請同行等を活動として行っている NPO 法人やまなしライフサポートへ訪問し、山梨におけるホームレスの実態についての学習を進め始めた。そのため、ゼミ生の学びを深める目的と、他の地域で私が以前より行っていたホームレスへの健康支援を今後山梨でも行っていくための予備的調査と合わせ、フィールドワークに同行してもらうこととし、2014年8月5日にゼミ生と調査を行った。フィールドワークで得られるデータを佐藤<sup>1)</sup>は、自分の目で見、耳で聞き、肌で感じた体験をもとにした資料としての価値を持ち、誰かが本等にまとめたものとは基本的に質が異なると表現している。今回の調査では、学生に対し、フィールドでの関わりを通し、よりホームレスについての実際を学ぶ機会を作ることで支援者としての成長を促し、ホームレスの方への支援を行なう人材の充実化を図るとともに、健康調査を行いながら、今後より充実した活動を行うための予備的調査も同時進行で行うことができたと考えている。この調査の必要性は、早坂<sup>2)</sup>の「日本における健康と貧困」からも読みとれる。早坂は、当該問題を論じるにあたり基盤となるデータが非常に限られているとしながらも、国民健康保険被保険者証の有無により受診率に差があることを示し、必要に応じて医療を受けることができないことが健

康に及ぼす影響は大きいと述べており、健康調査の必要性を問いかけていると言える。

調査結果については、質問紙の問いに対し、Aさんのように健康への関心はないと答えた方であっても、会話の中では「自分はかなり距離を毎日歩いているから」「食事はコンビニのため栄養バランスは悪いかもしれないが、朝と夜はしっかりと食べるようにしている」という話を聞くことができ、病院にかかることが難しい現状のため、関心とまではいかなくとも健康に対しての自己管理を行っている様子をうかがうことができた。また、Bさんのように関心があり「癌などが気になる」、「健診などはあればいい」という声があったとしても、仕事を失いホームレスという状況のため、健康診断等を受けられず、健康について向き合うことができずにいることが分かった。この状況は、阿部<sup>3)</sup>がまとめた、家族が必要な食料や衣服が買えない、(中略)病気であっても医療機関に通えない。これらは、現代社会において当然のごとく達成されていると考えられてきた生活水準が達成されていない状態であり、まさに「本当に貧困」と言えると述べている。そのため、日本国憲法第25条にある健康で文化的な生活を実現していくためには、本人の意思を尊重しつつも、一人一人の健康を守るという視点を重要視し、市町村による積極的な支援、援助等の取り組みが必要であると考えられる。

今回の調査時間は、19時から22時で行ったため、周囲は暗く、寝る準備をしている方が多かった。暗くなったらすることがないので寝るという発言から、睡眠時間については必要な分を確保できている方が多いと考えられる。しかし、睡眠の環境としては、外であるため、寒さ、暑さ、何よりも安心しての熟睡ができる環境ではなく、睡眠の質という観点からは、劣悪な状況であると言える。食事については金銭がからむため満足いくような食事の摂取はできていない方が多いようだ。食事の回数も1回もしくは2回であり、移動距離等の消費カロリーから考えても不足していると考えられる。食事は毎日必要な物であり、健康に対しての影響が大きく、随時支援が必要な項目であるとも言える。食事は生命維持に直結するため、健康の変化に対応するため健康調査を随時行える状況の確保が急がれる。運動については、体操等ではなく、徒歩が自分たちにとっては運動になっているという表現が目立った。車社会の山梨であるにもかかわらず、移動手段が徒歩のみのため、今回の調査に同行した学生と比べてもかなりの時間と歩数を上回っていた。これを充実していると考えられることもできるが、車での移動を主としている我々と比べ、必要以上に体を酷使している状況としても考えることができ、住居がなく、一定の場での休憩が許されない状況と合わせ考えるのであれば、一刻も早く定住の場の確保が必要であると言える。実際、フィールドワークを行った範囲（甲府駅を中心に半径1 km 圏内）であっても一人ひとり別々の場所を寝起きの場所とし、常に移動をしていた。寝床の確保だけを考えても、外であるため、住民や観光客等が近くにいる場合等、静かな場所へと移動を行うことも多いようだ。今回の調査時も花火を行っている住民がいるため静かな場所へ移動している姿が見られた。そのため、我々が今後調査を行うには、相手に合わせての移動が必要であり、行先も推測によるものであるため、フィールドワークを行った範囲（甲府駅を中心に半径1 km 圏内）であっても5名で調査時間を

3時間としたが不十分であった。5名を2グループに分けての調査も視野に入れていたが、服装等、外見だけでは判断がつかない方も多く今回は5人での1グループとし、注意を払い調査を行った。ホームレスの実態を把握するためには、より多くの時間と協力者の人数(グループ)をさらに増加しなければ円滑に進まないことが分かった。今回の調査範囲には、24時間営業のネットカフェ系は見あたらなかったが、深夜営業しているファミリーレストランや居酒屋等の飲食店が多数あり、確認できない場所が複数あることも今回知ることができた。後藤<sup>4)</sup>は、ネットカフェ難民に注目し、そのうち4割は路上生活を経験しているとまとめている。今回の我々の調査では、暖がとれるような建物内の調査は行っていない。しかしながら、出会えたホームレスは6名であり、全国調査データのほぼ半数である。そのため、今後、実態調査を行うためには簡易的な寝泊りが可能な施設となり得る場をあらいだし調査のフィールドに加えることにより、より多くの方とのかかわりを持つことができ、多くの方の健康支援を行うことができるのではないかと考えている。

フィールドワークを経験しての学生の声を下に記す。

- ・甲府駅周辺のホームレスに対する支援を行なっている方の話から、把握されているホームレスの数は少なく、事前学習の際、驚いていた。しかしながら、実際に自分たちで夜回りを行い体験したことは、小さな範囲の中で、予想していたよりも多くの方と出会い、まだまだ、把握できていない方も多くいるのではないかと思った。今後、把握できていない方への支援をどのように行うべきかを考えさせられた。
- ・今回の健康調査の際に、初めてのこともあり、どのように接するべきか悩んでしまった。また、面接の際、拒否をされる方もいたため、面接を行うことが怖く感じてしまった。
- ・熱中症対策のための物資を提供する際、快く受け取っていただけることが多く、やはり、必要な物であっても購入等を行うには難しい状況にある方が多いと分かった。

上記のように悩みながらも、ホームレスにどのようにかかわって行くべきかを試行錯誤している姿が見られ、今後、ホームレスへの支援を行なう貴重な人材として育つことを期待したい。支援はかかわることから始まり、かかわり続ける必要がある。調査を行う際の成否は、大谷ら<sup>5)</sup>が言うようにラポールの形成にかかっている。結果では調査に要する時間は1人に対して10分程度と述べたが、これにはラポールの形成という時間を含んでいないことに注意が必要と考える。調査の目的はホームレスの方の実態調査であり、全員に対しての健康支援を行なうことにある。そのため今後は、健康支援を行なうためには、実態調査に時間をかけ、援助者の成長と共に関係性を重視し行っていきたい。



## V 謝 辞

今回の調査に対するきっかけを作り、企画や準備の段階からかかわってくれた古川ゼミ4年の渡邊未佳子と和田千尋に感謝を述べる。本来ならば、調査範囲や調査票の内容を共に考え、調査に必要な準備も行い、フィールド調査も共に行った者であるため、調査協力者として記載すべきであると考えたが、本校の規定により学部生である2名を連名で記載することができなかった。そのためここで感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞とさせていただきます。

### 引用文献

---

- 1) 佐藤郁哉 (1992) フィールドワーク 書をもって街へ出よう 新曜社 p31
- 2) 早坂裕子ら (2005) 貧困と社会的排除 福祉社会を蝕むもの ミネルヴァ書房 p137
- 3) 阿部彩ら (2012) 日本社会の生活不安 自助・共助・公助の新たなかたち 慶応義塾大学出版 p38
- 4) 後藤広史 (2013) ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援 人間関係・自尊感情・「場」の保障 赤石書店 p29
- 5) 大谷信介ら (1999) 社会調査へのアプローチ 理論と方法 ミネルヴァ p221

## Abstract

This is a preliminary investigation to facilitate the smooth performance of a future field survey about the homeless. Conducting homeless research requires lots of work and time since homeless people are not in a fixed place. Finding individuals, obtaining the consent from them, and interviewing them are not easy. According to the data of the Ministry of Health and Welfare (MHW), there are about 13 homeless people in Yamanashi. The current research conducted around Kofu station involved six individuals which are account for about half the population in Yamanashi. However, it is speculated that there are more homeless individuals than the MHW's statistical data. Increasing the number of researchers, expanding the research area, and extending investigation period would help gain more accurate and reliable information. Such challenge is believed to contribute to improve the field research, which ultimately improve health conditions of more individuals.

Key words : Fieldwork

Homeless

Health support